

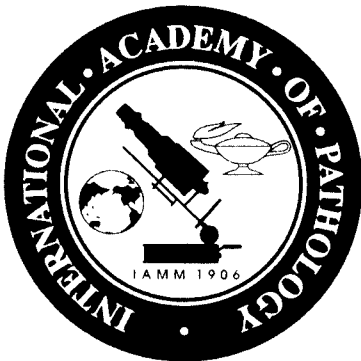
IV. ハンガリーの学会

井関 充及

1. "IAP"と言う学会

国際病理アカデミー

(International Academy of Pathology) の通称はIAPで、日本支部の会員は平成8年4月30日現在で555名である。本会の目的は、国際的協調のもとに病理学の発展を計り、その教育を行う事である。本会の国際会議は2年に1度世界各地で開催されている。西暦2000年は名古屋での開催が決定している。

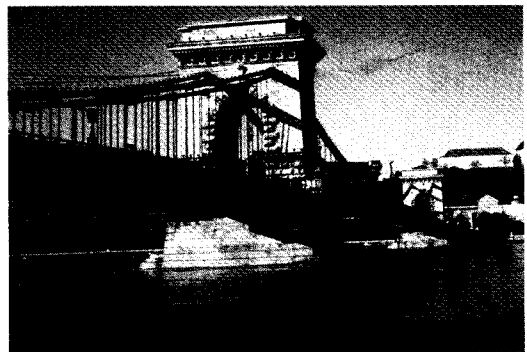


IAPのシンボルマーク

2. 学会主催都市ハンガリー

今回、出席した第21回IAP会議は平成8年10月20日～25日の期間、ハンガリーの首都ブダペストで開催された。ハンガリーはヨーロッパの中央に位置しウクライナ、オーストリアなど数カ国と国境を接している。マジャル人が大部分を占め公用語はマジャル語である。ハンガリーの首都のブダペストは"青きドナウ川"をはさみ西側がブタ、東側がペストからなっている。建築物はロ

マネスク、ゴシック、バロック、アールヌーボーなど古典的な遺産が数多く残されており、教会の荘厳な鐘の音を耳にすると、ふと中世のヨーロッパにタイムスリップした錯覚に陥る。ハンガリー料理は、ピーマンから作られる紅の色をしたパプリカによる"味つけ"が有名なようであるが、会期中に口にした食事は頗る美味で、日本人の私の舌に馴染む料理であった。ただ驚かされたのは、街の中に「すし」と大きな看板を掲げた寿司屋を日本人が経営していたことである。世界各国に日本料理が滲透しているようである。



ドナウ川とくさり橋をペスト側より望む

3. 学会開催

学会場はペスト側にあり、建国一千年に造られた英雄広場の近くに位置していた。会議に対する国の対応は非常に好意的で、学会の参加証を表示すれば、会議の期間中は会場までの地下鉄運賃は無料であった。ただ運賃の検札は厳しく、学会参加証をもたずチケットを買っても改札がされてなけ

れば相当額の罰金が課せられる。会期間中は学会参加証を首に掲げ、10数席からなる小さなマッチ箱を数個繋ぎ合わせたような地下鉄を頻繁に利用した。

10月20日のオープニングセレモニーをもって第21回IAP国際会議の幕が切って落とされた。会議は午前8時30分から午後5時まで5日間にわたり開催された。学会場は国際会議場としてはやや手狭な感はあったが、会議室の移動の際には時間的ないしは場所認知の点などから便利であった。学会は主としてシンポジウム、教育セミナーおよび一般演題から構成されていた。本会の一つの特徴として、シンポジウムの中でWHO分類に関し編集員が各臓器別に解説がなされる。組織分類において稀な症例の呈示や、分類上の問題点の呈示などWHO分類の理解の一助となる。本会の目的である病理の教育として、教育セミナーが多く組み込まれている。今回は腎腫瘍と前立腺腫瘍のセミナーを受講した。病理診断学を柱とする講演であったが、最近の話題なども盛り込まれており有意義な講演であった。

ただ境界領域の病変の診断で呈示されたスライドからの判断ではあるが、演者はdysplasiaとする症例で明らかに悪性と思われる症例もみられた。境界領域など微妙な診断に関しては、診断者により若干のズレがあるように思われた。Telepathologyが取り上げられる昨今であるが、標本すべてを網羅する訳にもいかず、診断が発送画面に左右され発信者の判断に委ねられる可能性が大である。Telepathologyの問題点は意外とこのあたりにあるかも知れない。古典的な病理診断学でさえ、まだまだ解決されな

い問題も山ずみされおり、病理診断学の奥の深さを実感した次第である。ミクロの病理診断学の充実が充分なされず、最近のように遺伝子や分子生物学などミクロの世界よりさらに小さな世界への研究のみが先行するようであれば、思いがけない落とし穴におちいるのではないかと危惧する。そのためにも常に人体というマクロへのfeedbackを忘れないよう心がけねばと思う。一般演題は口演と示説からなっており、今回は示説にて参加した。演題は"膀胱拡大術後に発生した絨毛腺腫"で、27年前に膀胱萎縮に対し小腸を使って膀胱の拡大を図ったが、長期間に渡り尿に晒される事などが原因で吻合部を主体に絨毛腺腫が多発したという症例報告であった。腺腫の性格についての意見などを期待したが期待はずれの結果となった。口演に比べ示説への質問などは、国際学会といえども少ないような印象であった。

4. さらばハンガリー

温泉都市としても有名なブダペストの温泉の湯に浸る事無くこの都市を後にするのは若干心惜しいが、中世をいまだに残したいにしえの国ハンガリーでの学会は、学会の内容も含め満足のいくものであった。また国際学会は単に研究発表に終わらず、欧米の研究者との交流をもたらし、最新の研究なども肌で感ずることができ、私にとっては有意義な6日間であった。芸術品ともいえるような歴史を刻んだ建築物など、目の保養とともに心を和ませしてくれる日々であった。後ろ髪を引かれる思いでブダペストを後にした。